

第3回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介

■顕彰委員会委員長の講評



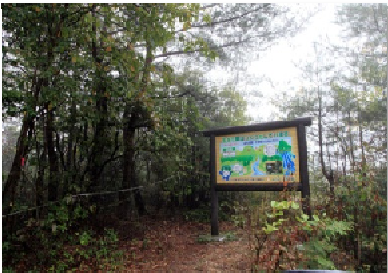
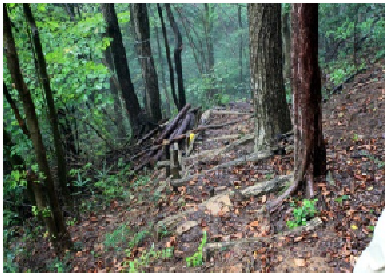
「今回、先選考委員会で審査させていただきまして、大変苦労いたしました。選をはずれたものも、2、3年経ってよくなるのを待ってからということになり、どれがより優れているかは甲乙がつけがたいものでした。概して言えることは、各分野で進化をとげまして、それぞれ完成度が高くなっていると言えると思います。私もビオトープの先駆者と言われておりまして、1990年代には講演などに引っ張りだこでしたけれども、現在ではとても通用しないと思います。今日の波田先生の講演をお聞きしておりますと、はあはあと聞いているだけでして、それだけ専門化が進んだと思います。それで、

今回の選考結果をみて皆さん意外と思われたかと思います。グランプリにあげられたものは、従来のような造園的技術が優れていることから選ばれたのではなく、広域的な里山全体に広がるようなものになりました。今回これを選んだのには、2、3理由があります。一つは、わが国では非常に小サイズを完璧に、ある意味で新規の造園という感じで受け止められてしまい過ぎた傾向があります。本来、ビオトープとはそういったものではなく、地域全体にひろがってもよいものでして、一つのビオトープ概念の是正というものでグランプリを決めたという訳です。従来、造園業を手がけた会社でも、今後は地域的な広がりを持った仕事を手がけていくことがこれからは必要かなと思うのですがどうでしょう。

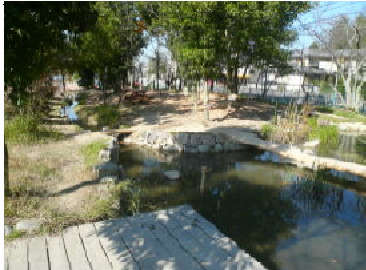
今度の災害、津波でひどいことになったのですけれども、こういうところに広域的な生態系を再生するということも大切なことかと思えます。皆さんもそういったものに参加していただいて、庭園的なビオトープから広域的なビオトープの方に進められるのもよろしいかと思えます。」

（静岡大学名誉教授 杉山恵一選考委員長の講評の抜粋）

■ビオトープ大賞

名 称	水土保持の森 みたけ
受賞者	(株)岐阜造園
【テーマ・概要】 「企業との協働による森林づくり」 わが国の68%は森林におおわれているが、1960年ごろより手入れのされない里山放置林が広がっている。このようなことから、ここでの取り組みは、新たに自然を創造するのではなく、人間活動によって変化させた里山などの環境を再び人が手を入れることによって、多様な生物の生息環境を取り戻すことを目指した「森づくり」である。	
【整備方針と管理手法】 森林面積14.66ヘクタールの森林はアカマツ、広葉樹混交林、ヒノキ人工林、そして沼、湿地、草地と多様である。基本的な整備の方向としては、将来にわたり植物、動物、昆虫、鳥類など生物観察のフィールドとするために、先ず林内歩道の整備と多様な森林形態に配慮した間伐や倒木の処理、沼・湿地は水際まで繁茂した樹木の伐倒除去などをおこなっている。森全体が荒廃しているため当区域内は日照不足で、動植物の生息に何らかの影響を与えていると考えられる。以上のようなことを念頭に当森の改善を図る取り組みとしている。作業は1回/1ヶ月で、有志社員や地域のボランティアさんでおこなっている。	
【森の様子】  ・ 森の入り口  ・ 整備された散策道  ・ 倒木	

■学校ビオトープ大賞

名 称	竜王小学校ビオトープ（わくわくトープ）（滋賀県蒲生郡竜王町綾戸 275）	
受賞者	滋賀県竜王町立竜王小学校、竜王小学校PTA	
【テーマ・概要】 当ビオトープは 1988 年に卒業生が記念植樹した、クヌギ、シラカシ、コナラなどからなる「みどりの森」がベースとなっている。学校ではこの場所を学区の身近な自然を守り育て、地域みんなが集う場として、多様な生きものが住みつくビオトープの出現を目指している。		
【整備方針と管理手法】 植樹した木々は 22 年の年月が経ちクヌギなどは樹高が 15mほどに成長し、周辺も拡張や小川の整備が順次図られてきた。平成 22 年度よりは、この環境を再整備してビオトープとしての質をより高めるために、学校内にビオトープ委員会を設置した。取り組みでは、池や小川のヘドロの搬や石組みを改善してせせらぎの流れを創出するなどの育成管理をおこなっている。また、ここでは周辺地域の企業や専門企業からの支援や技術的指導を仰ぐなどして、地域全体で学校ビオトープを中心に身近な自然を取り戻すことに挑戦している。		
【ビオトープの様子】		
		
・ビオトープ観察池	・小川のヘドロ除去	・児童による維持管理

■顕彰委員長賞

名 称	環境交流スクエア エコガーデン（岡山県倉敷市水島東千鳥町 1-50）
受賞者	株式会社山都屋
【テーマ・概要】 「市民に憩いと交流の場を提供する」 当施設は元々企業及び一般向け交流会施設として建設されたものである。これを、エコガーデン（ビオトープ）として、・憩い・生きもの生息の場・学習・地域交流など環境学習と地域交流の場所づくりをコンセプトして改修された。訪れる人々が創出されたビオトープで身近に生きものにふれあえるとともに、地域コミュニティの一つの拠点となることを目指している。	
【整備方針と管理手法】 整備に当たっては、改修工事で発生する自然石や舗装材を有効に利用することとし、指標生物としているゲンジボタルやヘイケボタルの水路や湿地などへの流水は雨水を活用することとしている。また、ビオトープ内の植栽は周辺の植生に習いアカマツやシイ類の同樹種を多く取り入れ、野鳥や昆虫などを呼び込み易い環境を整えることを目指している。管理については地域ボランティアや、専門技術者と連携を図りながら良好なビオトープ環境の育成を目指していく。	
【ビオトープの様子】  ・エコガーデン全景 ・観察デッキを整備した湿地 ・ビオトープ池	

■顕彰委員長賞

名 称	寿恵野の森ビオトープ	
受賞者	豊田市立寿恵野小学校（愛知県豊田市鷺鴨町東屋敷 50）	
【テーマ・概要】 「“いのちの輝き” 見つけよう」 当ビオトープは造成されて12年目を迎えた。当初は「ビオトープ」という空間に対する理解不足から、外来種の持ち込みなどがおこなわれ、本来のビオトープとしての環境が損なわれてきた。先生と児童などで話し合いがおこなわれ、児童中心で維持管理などをおこなうこととした。このような活動は環境学習につながり、生きものについての知識を持つ「豆博士」誕生にもつながっている。		
【整備方針と管理手法】 2009年に劣化したビオトープを再生することになった。これを契機に、先生と児童たちでビオトープの整備について考え、育成や維持につてのルールを定めた。むやみやたらに人が立ち入らない場所としじっくり生きもの観察ができる場所を観察路の設置で明確にしている。森づくりでは、当初植えられたミズナラが多く見られたが、これらは本来この地域に生育している樹木ではないことから、コナラ、アベマキ、ヤマザクラ、林床にはヤブニッケイやマンリョウなどを植樹して本来この地にあるべき森の出現を目指して整備をおこなっている。通常の草抜きなどの維持管理や観察は児童が中心で進めている。		
【ビオトープの様子】		
		 ・アメリカザリガニ捕
・造成当初のビオトープ	・泥あげなどの維持管理作業	

■技術特別賞

名 称	日本橋川護岸緑化			
受賞者	イビデングリーンテック(株)			
【テーマ・概要】 「多様な植物を用いての景観護岸の創出」 コンクリート護岸で整備された都市河川の水辺を人為的ではあるが、自然的要素を取り入れ、人々に潤いや安らぎを与えてくれる自然空間が創出することを目指している。				
【整備方針と管理手法】 護岸を単に緑化するのではなく景観を構成する要素として護岸景観を捉える。緑化に採用する植物はヤマザクラ、エノキなどの高木、ヤマブキ、ウツギ、ハギなどの低木やオオソツバタ、オオイタビなどのつる植物、下垂ではヘデラ類とし景観の自然性、多様性を試みている。また、高木、低木の植物種は日本産のものを用いている。夏季の乾燥防止と冬季の保温性確保のための稲わらのマルチングや灌水はドリップチューブによる点滴でおこない、年間コントローラーにて自動制御している。				
【護岸の様子】				
				
・ 施工後	・ カツラ	・ カンツバキとバラ	・ 護岸景観の様子	

■特別賞

名 称	ぼてじゃこの池 (滋賀県野州市市三宅 681-1)
受賞者	オムロン株式会社 野州事業所
【テーマ・概要】 「地域の生物多様性保全と郷土への愛と人の環を育むビオトープ」 ビオトープでは、絶滅の危機にある淡水魚「イチモンジタナゴ」をシンボルに、地域の生物多様性の保全に向けた取組を実践している。導入する動植物は郷土の自然環境を調査し選定している。また、当ビオトープを郷土の希少種保全の場としてだけではなく、従業員の環境学習の場ともしている。	
【整備方針と管理手法】 琵琶湖の東の当地域は、水路や池、湿地など多様な水辺環境が存在し、多種多様な生物が生息した地域である。当ビオトープではイチモンジタナゴをシンボリックな対象として保全しながら、他の多くの生物も共存できるよう水深のある池、流れと浅瀬のある水路、湿地といった多様な水辺環境を再現している。メンテナンスは博物館や大学、自然保護団体など専門家と連携を図りながら進めている。また、植栽やビオトープに侵入する外来生物の駆除などは専門家の指導のもとで従業員が取り組んでいる。	
【ビオトープの様子】	
 ・ビオトープ全景  ・従業員による植栽整備作業  ・タナゴの産卵に必要なドブガイ	

■地域貢献賞

名 称	御前山ビオトープ (茨城県常陸大宮市松山 820)
受賞者	御前山ダム管理センター
【テーマ・概要】 「地域の希少植物の保全」 当ビオトープは、農業用の御前山ダム建設に伴い水没する地域に生育する、ナガエミクリ、アギナシ、フタバアオイ、イヌショウマなどの希少植物の保護を目的とし、これらの植物を移植する場として整備された。ここでは、希少植物の保護に伴い、環境教育の場、学問的な調査研究、自然とのふれあいの場、地域活性化資源など多面的な役割が期待されている。	
【整備方針と管理手法】 植物の移植などの整備は、地域の自然は地元住民が見識も深くその環境を熟知していることから、これら地元住民が中心となって、専門家の助言や関係機関の支援を受けながら順次進められている。移植した後の補植や草取りなどの育成管理や施設の補修などは地元住民と NPO、関係機関など多様な主体の協力を得て取り組んでいる。また、林間へ移植した希少植物の日照条件改善のための間伐作業も 2005 年より水源地全体を視野に着手している。	
【ビオトープの様子】	
 田んぼの学校  手前：池にナガエミクリ移植 左：テップ反転 奥：河川改修と昭栄  クモノスシダの移植作業	

■環境教育賞

名 称	もうり農園・もうり沼ビオトープ（東京都江東区毛利 2-2-2）
受賞者	東京都江東区立毛利小学校
【テーマ・概要】 「農業と一体化したビオトープ」 もうり沼ビオトープは、農園の水田と隣接したビオトープを水路で結ぶことにより、水の自然の流れを再現している。このことは、水田の環境、水の流れる環境、ビオトープ沼の環境といった異なる環境が出現することになり、多様な生きものの生育・生息が可能にする。	
【整備方針と管理手法】 ビオトープは、児童と保護者の手作りで造成。メンテナンスについても、児童が主体でおこなっている。課題であった、水田とビオトープの水の確保は、学校のプールの水を「サイホンの原理」を応用して灌水している。また、田植え、稲刈りなどの農業体験時にあわせてビオトープの維持管理をおこなうことは、季節ごとの生きものと自然関係などの変化を体感することにもつながっている。	
【ビオトープの様子】  ・もうり農園での田植え  ・水田にやってきたカルガモ  ・ビオトープに咲く植物	

■環境教育賞

名 称	学校ソーラービオトープ（富山県下の保育園・幼稚園 8箇所）
受賞者	ユーシン建設株式会社
【テーマ・概要】 「環境に優しい新エネルギーと自然を融合させた取り組み」 学校ソーラービオトープはアクリル水槽とソーラー発電による水循環を組み合わせた、新たな発想によるビオトープである。保育園や幼稚園児が自然環境の大切さや新エネルギー技術の有効性を手軽に、わかりやすく、身近に学習できることを目指している。また、省スペースにビオトープを創造することは、手軽に草や木に触れ、そこを訪れる昆虫の観察できる場所を提供する。	
【整備方針と管理手法】 水槽内には発砲スチールで起伏を造り、その場所の土・草・木を移入、生きものが棲める環境をつくりあげる。制作には園児なども参加して、自然のしくみなどを話しながら、草や木をセットしていく。水の循環や濾過は、ソーラー発電という自然エネルギーを利用した方法でおこなっているため、環境学習の教材としても活用できる。	
【ビオトープの様子】  ・園児たちと造形  ・完成したビオトープ全景  ・園庭に設置したビオトープ	